

栃の木からの手紙



いつの間にか辺り一面の緑。6月に入って春蟬が鳴き始めると藤の木が栃の木に負け地と葉や花房を急に伸ばしている。5月末から6月上旬のあつと言う間の出来事。まるで宮崎駿監督の“となりのトトロ”の一場面を思わせる光景で、たくさんの命の営みを感じる季節になりました。

展示圃場の植付けも皆さんのお蔭で終わり、秋の収穫が楽しみです。

7月 文月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

1日： 新月

2日： 半夏生

5日： 感謝の集い

7日： 小暑

10日： 農事視察10時から

(高橋・千葉・森田・近藤の4軒を視察します)

21日： 土用の丑(一の丑)

23日： 大暑

28・29日： 名寄瑞泉郷 ひまわり刈り

31日： 新月

花粉 6月上旬、中国の黄砂が飛んで来た様子は無いがなぜか車が黄色っぽく見える。今まで気にならなかったが、この時期例年になく白樺などの花粉の量が多い事が報じられていた。道路や庭で雨上がりに出来た水溜り。その縁に黄色い筋が残っています。こんな光景を見ませんでしたか。

半夏生(はんげしょう) 陰暦に登場する雑節の一つで二十四節季の夏至から数えて11日目頃になる。二十四節季の各節季を五日ずつ三つの候(初候・次候・末候)に細分して季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などで表現したものを七十二候といいます。この頃には半夏(烏柄杓・からすびしゃく：左中写真)という薬草の花が咲くことから七十二候の三十候(夏至の末候)では“半夏(はんげ)生ず”とされています。偶然にも半夏生・半化粧(左下写真)と言う植物があるのです。

昔は半夏生という梅雨後期の始まりの雑節を田植の終了の目安として考えていたようで、夏至から半夏生の間が田植えの最適時期で遅くても半夏生までに終われば半夏半作といって例年の半分の収穫を上げることができました。現代では、品種改良等により状況は変わりますが、七十二候を身近な事象で置き換えるもおかし。

京都花の寺より

身は 花とともに 落ちぶれど

心は 香とともに 漂う

